

齲蝕から見る子どもの背景

星野 倫範

明海大学歯学部 形態機能成育学講座 口腔小児科学分野

齲蝕の予防は、生涯にわたる歯科保健の課題であるといわれ、これを実践する例えば8020運動のような国民的な取り組みによりわが国の齲蝕有病者率も減少傾向にあります。平成27年の歯科疾患実態調査では、3歳児で齲蝕のない者の割合が83.0%と平成21年の77.1%から比べると大きく減少しており、歯科の診療室でも子どもの齲蝕が減ってきていることが実感できるかもしれません。その一方で子どもの「口腔崩壊」と呼ばれる現象が最近新聞でも取り上げられ、齲蝕が十本以上あったり、歯の根しか残っていない未処置歯が何本もあったりする状態が学校の現場でも問題となっています。この原因としては、子どものもつ社会経済的背景があげられており、例えば経済的困窮により歯科受診ができなかったり、習い事や家業の手伝いなど様々な状況で歯科医院に行く時間がなかったりすることが考えられています。また近年では虐待の1つであるネグレクトがある場合にこのような「口腔崩壊」が生じることも指摘されています。またひと口にネグレクトといっても育児放棄を原因として口腔内の齲蝕の本数などに限らず全般的に子どもの状態が悪い場合もあれば、一見した子どもの状態は普通でも病院受診など医療的な部分だけがフォローアップされていないメディカルネグレクトといえるような場合、さらに狭く歯科の部分だけに特化したようなデンタルネグレクトと呼ばれるような場合もあります。いずれにしても齲蝕罹患状況やその他口腔内の状況における問題を抽出することによって、子どもが抱える背景に何らかの問題を浮き彫りにすることができることから、口腔内の状況が子どもの抱える背景の鏡になっているとも考えられます。こうしたことから、歯科健康診査や歯科診療の場で、齲蝕の本数が年齢での平均的な本数よりも異常に多い場合や齲蝕のでき方に問題があると考えられる場合には、齲蝕の治療という側面だけでとらえるのではなく、その子がもつ社会経済的背景や養育環境、虐待の有無なども含めた背景も想定し、医科、歯科、学校、行政など子どもの成育過程で関わるすべての業種と連携し、健やかな成長を育めるような環境を整えていくことが今後の課題ではないかと考えます。